悪徳

悪徳

今東光

中央公論社

悪徳

©一九六三
検印廃止

定価三八〇円

昭和三十八年六月二十日初版印刷
昭和三十八年六月三十日初版発行

著者　今東光

発行者　宮本信太郎

印刷所　精興社

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話　㊀五九二一～二九
振替口座東京三四

目

次

帯広にて　七
別院　一八
東京の客　三〇
夜の女　四二
表と裏　五四
隠れ家　六六
慾望は川のごとく　七七
二の舞　八九
都鳥　一〇一
再会　一一三
流れ星　一二五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

遠くて近きもの　二三七
駈落者　一四九
小僧　一六一
鉄のごとくに　一七三
大阪　一八四
院代　一九六
院代部屋　二〇八
爆発　二三〇
声明書　二三二
壺　二四五
追討ち　二五七

三筋の道　二六九
ストーム　二八一
修羅場　二九二
めし屋　三〇四
裸の町　三二六

装幀　挿画　村上　豊

悪徳

帯広にて

森守忍(しゅにん)は冷たい風がさっと青く剃った頭を逆さに撫でたので、ひやりとした。

「うう、寒い」

頸からさげた輪袈裟をゆすり立てて、ぼろぼろの茶色の背広の襟を立てた。

「ふん。そんな格好よしなよ。みっともない」

と後から風呂敷包みを抱えた八つも年上の女房が声をかけた。

「どうしてさ。襟からつめてえ風が吹き込みやがる」

「どうせここは北海道だよ。北海道も帯広だよ。これから雪が降って来るんだよ。寒いのは当り前じゃないか」

「格好なんて、かまっていられるかよ」

「オーバーが無いんだから仕方がないさ。もっと、しゃんと胸を張ってお歩きよ」

「だってよ」

「寒そうに顫えてると、まるで貧乏ゆすりしているようでみっともない」

「だって貧乏してるんだから仕方ねえや」

帯広の停車場で汽車から降りた五十五、六歳の坊主は、自分もあまり上等でないトランクを両手に持ち、肥ってのそのそ歩く女房の歩みに舌打ちしながら、帯広の駅前を見渡した。

汽車が汽笛を鳴らして出て行った。

函館から乗って来た汽車だ。いよいよ北海道落ちと決めて、東京のしがない世帯をたたんで、はるばると北海道までやって来たものの、駅前から車に乗る銭もないので、駅員の軽蔑するような目差しを痛いほど背中に感じながら、どっこいしょと歩きはじめたのだ。目当ての寺までどのくらいあるか見当がつかない。その距離もわからないし、道順も無鉄砲だ。どうせ寺などといっても京都などと違って少いに違いない。聞けばすぐわかると思っているのだ。

「もっと姿勢よくお歩きったら」

後から年上の婆が、また大きな声で叱咤した。

「無理言うなよ。俺は両手にこんな大きなトランクを二つも提げてるんだぞ」

「だったら寒い筈ないじゃないか」

実際、守忍はぐっしょりと汗をかいてしまった。二、三丁歩いたら両手が抜けそうだ。

「お、お、おれは猫背なんだ。治るもんじゃねえや」

と答えると、彼女は舌打ちした。

だだっ広い町だ。あんまり人影も見かけない。広い通りが目路はるかに続いている。
「はッくしょん。畜生」
守忍はあたりをぐるりと見廻して、誰にともなく怒鳴りつけた。
女房のお須賀と守忍の行こうとする寺は、帯広といっても町はずれで、むしろ隣接する村境に近いところに建っている庵室だった。
日本内地では見ることも出来ない十勝平野に、帯広という街は農産物の集散市場として発展した。まったく鯨の腹の臍のような町だ。一八八三年すなわち明治十六年に、北海道を開発しようというけなげな志を抱いた少数の内地人が、この広大な十勝平野に足を踏み入れ、営々として開拓して以来、今日ではビート、木材、アマなどの原料依存による工業も興って、道東地方第一の都会になったのだ。そんな町中に目当ての寺がある筈もなく、二人は大袈裟にいえば何時間もかかってトランクを運んだ。
「まるで死骸の入ってるトランクみてえに重てえや」
守忍は女房のお須賀に、やけくそになってこんなことを言った。
「冗談じゃないよ。そんなことがお巡りさんの耳にでも入ってごらんな。この辺で見かけない新顔だから、ちょっとおいでをくらったらどうするんだい」
「なあに。護送車で送ってもらった方が助からあ」
「あ、そうだ」
おかみさんはぽんと膝を叩く真似をした。帯広の市場帰りの荷車にでも乗せて貰おうと思いついたのだ。
「名案があるよ」
彼女は小走りにその辺の路傍に置いてあるリヤカーの小僧のところに行くと、何やら一生懸命にくどき立てて、一枚の札を握らせた。
「よし。行くベス」
道産児らしい男の子は守忍の持つトランクと、彼女の大きな風呂敷包みをリヤカーに積んでくれた。
「どこさ行くの」
「谷汲寺だよ」
「聞いだことねえス」
ぎゃふんときた。これではどこへ行ったらいいのかわからない。
「何でも町はずれだってえから、そっちの方へ行って聞いておくれよ」
二人はリヤカーの後についてとぼとぼ歩いた。
「うめえ工合だったな」
守忍は、いつでも急場になると、このお母ちゃん女房が知恵をしぼって難関を突破するのに感心すると同時に、この女にすがってさえいれば生活は何とかなると思うのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

った。
　あっちこっちで尋ね廻って、帯広市などとはかりそめにも名乗れそうもない、うらぶれた村境に、何やらこんもりと林めいたものがあって、その中の昼間から化物の出そうな庵寺に着いた。
「ちょっと。これがあの三十三番の札所の谷汲寺の別院かい」
　肥った女房は狸のように口をとんがらせて唸った。
「他になければ、これだろうよ」
「ふん。お前の話ったら、いつだって、これだ。あたいに何て言ったい。西国三十三番の札納めの谷汲寺の別院だ。かりそめにも別院というからには別格本山だってぬかしたじゃないか。それがこのざまだ」
「今更俺に文句を言ったってはじまらねえよ。ここは北海道だぜ。俺は東京で彼奴の口から良い寺だって聞いたから来たんだ。文句があったら彼奴に言えよ」
「何言ってるんだい」
「だって、そうじゃねえか。お前が欺されたと同じに、俺だって一杯喰ったんだ。人を見たら泥棒と思えとはよく言ったものさ」
「とんでもないことお言いでないよ。あたしゃね。ただひどい寺だって言ってるだけで、欺されたの何のと言ってるんじゃないよ。こんな寺でも譲って下さった御恩は御恩さ。お前は欺されたなんて文句をあの人に言えた義理じゃないよ。誰がお前なんかに寺をくれるもんかね」
「へえ。それじゃ誰にくれたんだ。俺はこれでも住職の資格があればこそ貰えたんだ。欺されたのは事実さ」
「もう一度言ってみな。欺されたのは、あたいがお前に欺されたんだよ」
「何だってよ」
「もう、忘れたんかい」
　肥った狸は両手を腰の番いにあてると、少し股を開くようにして、
「今度は別格本山の住職になれたから、もう苦労はかけないって。ふん。大した別格本山さ。お前はこんな庵寺だってのを、はなから承知の助だったんだろう」
「そ、そんなことあるもんか。俺だって、もう少しましな寺かと思ったんだ。つまり寺らしい寺だとな」
　二人は荷物を本堂の前に置くと、茫然として佇みながら喧嘩した。
　人の気配もない庵寺の庭にさらさらと落葉が舞い落ちてくる。今にも狐か狸が出て来そうな寂然とした境内だ。
「境内は広いぜ」
　守忍は一服うまそうに吸いながら改めて見廻すのであった。
「あきれたな」

「どうしたのさ」
「寺のくせにトタン屋根だぜ」
トタンの波板の間から粉雪が吹き込んでくるような気がして、いっぺんに襟もとが寒くなってくるのだ。椎の実でもあろうか、ばらばらと激しい音を立てて病葉とともに降ってくる。
女房は暗くならないうちにと井戸から水を掬んで早や拭き掃除をはじめた。本堂には本尊の観世音菩薩の立像がまつってある。片手はもぎ取られているが、真黒に光っているだけで、尊容は仰ぐことが出来ない。どうせ、まともなお勤めをする気もないのだから御本尊が観音さんだろうが不動さんだろうが、そんなことは平気だ。鼠の糞が山のように散乱していた。人けもない庵寺は何となく湿気がこもって、まるで水底のようにひんやりとつめたい。今年の冬が思いやられる。
「あたいが掃除している間に、お前は檀家総代さんのとこ廻って来たらどうだい」
「なんて」
「なんてってこたあないだろう。餓鬼の使いじゃあるまいし、着任の挨拶にきまってるじゃないか」
「ふん、住職が来るてえのに一人も出迎えもしやがらねえくせに」
「だって何時に着くと知らせもしなかったじゃないか」
「そりゃ電報こそ打たなかったが、寺に人の気配がしたら、一人ぐらいは覗きに来そうなもんじゃねえか」
「どうせこんな庵寺だから大したお坊さんが来るとは思っちゃいませんよ。だからあんまし法螺を吹きなさんなや」
「余計なこと言うな」
「おっと。そのまま飛び出しちゃいけないよ。道服に着換えてお行きよ」
というと婆さん女房は手早くトランクを開けて新しい羽二重の道服や白衣や輪袈裟や数珠を取り出して揃えた。
「おい。どうだい。この衣は……」
玉虫色の羽二重の素絹をひろげると、守忍は女のような喜悦を満面に漂わせた。お須賀は、この同棲している男がまるで女のように着る物に執着し、身装を着飾ることを喜ぶのを腹の中では軽蔑しているのだが、女道楽をされるよりはまだ着道楽の方が女房にとっては我慢していられると思って許しておくのだ。守忍は新しいものさえ着せておくと機嫌がいい。というのも彼の生い立ちや育った環境によるのだろうが、一人前の坊主の格好をするといそいそと出かけて行った。
しかし庵寺を出たものの、さて、どの方角に行っていいかわからない。しばらく四方の景色を眺めてから、はるか彼方の荒物屋にむかってせかせかと歩いて行った。

「唯今」
と玄関で声をかけて守忍が戻って来た頃には、もう、とっぷりと暮れて早い夜が来ていた。まだ電燈もついていないのでランプが明々と座敷や茶の間に輝いていた。
「さあ、さあ。どうぞ」
守忍は三人の檀家を案内して来た。
「おい。総代さんをお連れして来たから、お茶を淹れてくれよ」
お須賀も座敷に出ると挨拶した。古ぼけたストーブには裏にころがっていた薪を拾ってきて焚いたので部屋は快適にぬくもっている。
「こちらが高橋さん。会社にお勤めだ。こちらが畑さん。お菓子屋さんだよ。いいお方が檀家にいらっしゃる。お前は甘いもんが好きだからな。それからこっちが青木さんて農業をやっていらっしゃるんだ」
と紹介した。いずれも皆年輩の老人連で、北海道に移住して数十年を経た風雪の苦労を額に刻み込んでいる。
「はあ。和尚様がおいでになるつのに、つとも知らねで、はあ、申し訳ねえでございます。堪忍してけれ」
どこの国の訛りか青木さんというお百姓が謝った。
「なあに。そんなこと気にかけないで下さいよ。うちの人は直な人で、かえってお出迎えなんて頂くと困ってしまいますよ」

「いやあ、そう聞いて安心しました」
と高橋さんが言った。
「私は会社員ですから、お知らせがあれば停車場までお出迎えしたんです。会社から駅は近いんですから」
「近いって、どのくらいですか」
「二十丁ばかりですから目と鼻の先ですよ」
これには守忍がぎょっとした。内地だったら二十丁といえば相当な距離だ。それなのに十勝平野に来ると二十丁は目と鼻の距離だというのだ。この寺の檀家の一番遠いところにあるのは約十里も先だと聞いて守忍はすっかり厭気がさしているのだ。スクーターで飛んで行っても往復三、四時間はかかるだろう。それでなにがしかのお布施を貰ったところで合うもんではない。
(とんだところへ島流しか――)
来る早々から後悔してしまった。
お須賀は最初の印象が大切だとばかり、手早く肴を支度すると、二級酒の燗をして出して来た。口の重たい北海道の人達も熱い酒が入ると自然に口も軽くなる。次第に男ども四人は談笑に花が咲いた。もっぱら彼等はこの十勝平野で苦労した話を聞いて貰いたいのだ。酒が入ると守忍もつるりと薄禿げた頭を撫でながら、いつもの癖で大法螺が吹きたくなる。それに今度は大いにこの寺で腕をふるって金をかき集めようと思う下心があるから、相手の度肝を抜いてかかろうと考えた。
「私はね、御仏からつかわされて来たんですぞ」
またはじまったとお須賀は聞き耳を立てていた。
「私は御仏からつかわされて、この十勝平野に降臨したような気がしましたぞ」
守忍は居ずまいを正して言ったものだ。
「へえ。なるほど」
「ちょうど、海抜三千八百メートルという、世界で一番高いところにある南米のチチカカ湖に、古代ペルー人の創造神であるピラコチャが降臨したのと同じ感激でしたな」
彼は新興宗教の教祖のようにおごそかに宣言した。
「ははあ」
「ピラコチャ神はインカ王朝をこの地上に創りたもうた。インカ帝国第一代の皇帝マンコ・カパックは四方を征服し、インカ文明を打ち樹てた。私はピラコチャ神の使命を遂行したマンコ・カパックでもあると信じて居りますのじゃ」
聞いている三人の総代は、どうも聞き苦しい名前が守忍の口から飛び出してくるので笑うことも出来ずにうなずいていた。
「何ていう王様でしたかね」
「マンコ・カパック」
「はあて。マンコ・カパックだとね」
けれども何のことかわからない。この坊主は酒が入ると

少し頭がおかしくなるのではないかと思ったくらいだ。
「それで何をなさるので」
と高橋さんが質問した。
「私は今に帯広の公園に大きな舎利塔を建てるつもりです。舎利とは仏骨ですな。お釈迦様のお骨ですな」
「そ、そんなもんがあるんでございますか」
「私の知っている東京の大実業家が持っておられるんです。私だとそのお方は下さるというんです。但し舎利塔を建てるという条件ですがね。私は十勝平野のド真中に一大舎利塔を建ててみせますよ」
次の間で聞いていたお須賀は、
（また、はじまった――）
と渋い顔をしていた。人の顔さえ見れば大法螺を吹きたくなるのが性癖だ。一銭の金もないくせに、舎利塔を建てるなどということは彼女も今までに聞いたこともない話だ。何から思いついたのか俄かに南米の神さまなんかの名前を持ちだして相手を煙に巻いたつもりだろうが、これで最初の印象を台なしにしてしまったと思うと腹が立ってくる。
「そんな塔を建てるには莫大なお金がかかるでしょうな」
「ざっと四、五億円はかかりましょう」
「えっ。四億だとか五億だとか、まるで夢みたいな大金で」
「いや、高橋さん。びっくりすることはありませんよ。いやしくも谷汲寺別院という別格本山でやる計画ですよ。小ッぽけな募財は出来ませんぜ。どうせやるなら大きなことをせにゃ話になりませんや」
守忍は酒にあからんだ顔をてらてらさせながら胸を叩いてみせた。
勤人の高橋さんは、たった今知り合ったばかりの新しい住職の話を聞いて、すっかり彼を山師坊主と脱んでしまった。
（こんな帯広なんぞで、四億だの五億だのという夢みたいな莫大な金を集められる筈がないではないか。此奴は臭いぞ――）
と感じた。
それにひきかえて菓子屋の畑さんは、もし本当に帯広の公園に舎利塔が建ったら、舎利饅頭とか、舎利煎餅とか売り出して大儲けが出来るとほくほく喜んだ。
（この坊主は案外のやり手かもしれない。うまく交際ってみよう――）
と思うのである。
百姓の青木さんは、どう判断していいかわからない。たしかに自分の家の檀那寺の和尚さんが、とてつもない大計画を立てて、帯広の町に名所を一つ殖やしてくれるのは名誉だが、運動資金とか何とかの名目で金を寄付させられるという、あんまり感心しない結果になりそうだ。檀家総代

ともなれば無下に断ることも出来ないだろうと考えると、手放しで喜んでばかりもいられない。
（こりゃどっちつかずの態度をして、しばらく形勢を見るのが賢明だろう――）
と思うのだ。根が堅実な百姓育ちの青木さんは、四億だの五億だのというべら棒な金額は、はじめから頭の中に置いてはいなかった。
（とんでもない坊主が舞い込んで来たのかもしれないが、と言って法螺も吹き当てると大事業家とか何とか言われるだろう。それにしても厄介な坊主が、この静かで平穏な田園都市に出現したものさ――）
というのが三人の等しい感想だったかもしれない。
三人の檀家等が夜更けの道を帰って行くと、お須賀は夜霧の中に姿が没し去るのを見とどけてから、
「また何だって、あんな法螺を吹いたんだよ」
「何が法螺だよ」
「だって四億だの五億だのってお金、どこから湧いてくるんだよ。四万どころか四千円だってお前には拵える腕がないくせに」
「馬鹿にするない。今度こっちへ持って来た法衣は、夏冬三通りだから、ざっと十万円がとこはあるんだぜ。それを一銭も払わねえで持ち出したんだからな」
「馬鹿言っちゃいけないよ。中田さんから注意されたんで、あたいは一万円入金してあるんだよ」
「えっ、内金に一万円も」
「そうさ。それでなくっちゃ詐欺じゃないかね」
「内金なら五千円ぐらいも置いてくりゃ文句も言わせねえんだが」
「そのつもりで舎利塔とか何とか建てるのかい」
「そうよ。綿貫の奴がシャムだかビルマだかで舎利を手に入れたんだとよ。あれを捲きあげてやるつもりよ」
守忍はけろけろと言った。
お須賀は中田さんに迷惑がかかっては大変だと思った。
中田というのは愛知県の知多半島の小さな寺に生れ、その寺は弟にまかせて名古屋市で手広く綿糸の商売をして今ではかなりの産をも拵えている知人だった。
守忍は東京でやる仕事が何も彼も失敗に終り、到底、東京に居たたまらなくなったので、かつての兄弟弟子に泣きついて北海道の寺を手に入れた。そのための二十万円の金策に名古屋に出かけて中田に頼むと、中田は快く出してくれた。
「ついでに貴方から京都の法衣屋に紹介してくれませんか。僕は永いこと天台宗から離れていたんで、その方の伝手が何にもないんでねえ」
と頼み込むと、中田は何の造作もなく京都の森忠法衣店に紹介の名刺を書いてくれた。守忍は堀川の裏千家に近い法

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.